

〈新発見〉謎に包まれた家康築城時の江戸城を描いた最古級絵図 —松江歴史館所蔵「江戸始図」—

松江歴史館所蔵の『^{ごくひしょくしらす}極秘諸国城図』という江戸時代に描かれた全国各地の城絵図集の中にある「江戸始図」と題した絵図が、徳川家康が築いた江戸城の縄張り（城の平面設計）を描いた最古級の絵図であることが判明した。

関ヶ原の戦いの^{けいちょう}のち、慶長8年（1603）徳川家康は^{せいいたいしやうぐん}征夷大將軍になると、諸大名を動員した^{てんかぶしん}天下普請によって巨大な江戸城の築城に着手する。

慶長期の創築後、江戸城は大改修がくり返されたうえに、創築時の資料が数少ないこともあり、家康築城の江戸城の詳細は不明である。

慶長期の江戸城が描かれている最古の資料として、慶長12～14年（1607～09）の江戸城を描いたとする「慶長江戸絵図」（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）が知られているが、松江歴史館所蔵の「^{えどはじめず}江戸始図」も大名や旗本の名前や官職から、同じく慶長12～14年（1607～09）の江戸城を描いたと比定できた。

「江戸始図」は城郭構造を細部まで明快に描き、家康築城の江戸城が戦いを意識した強力な^{ようさい}要塞機能を備えた城であることが明確になった。

豊臣氏との決戦に備えて万全を期した家康の意思が伝わってくる。



えどはじめず
江戸始図

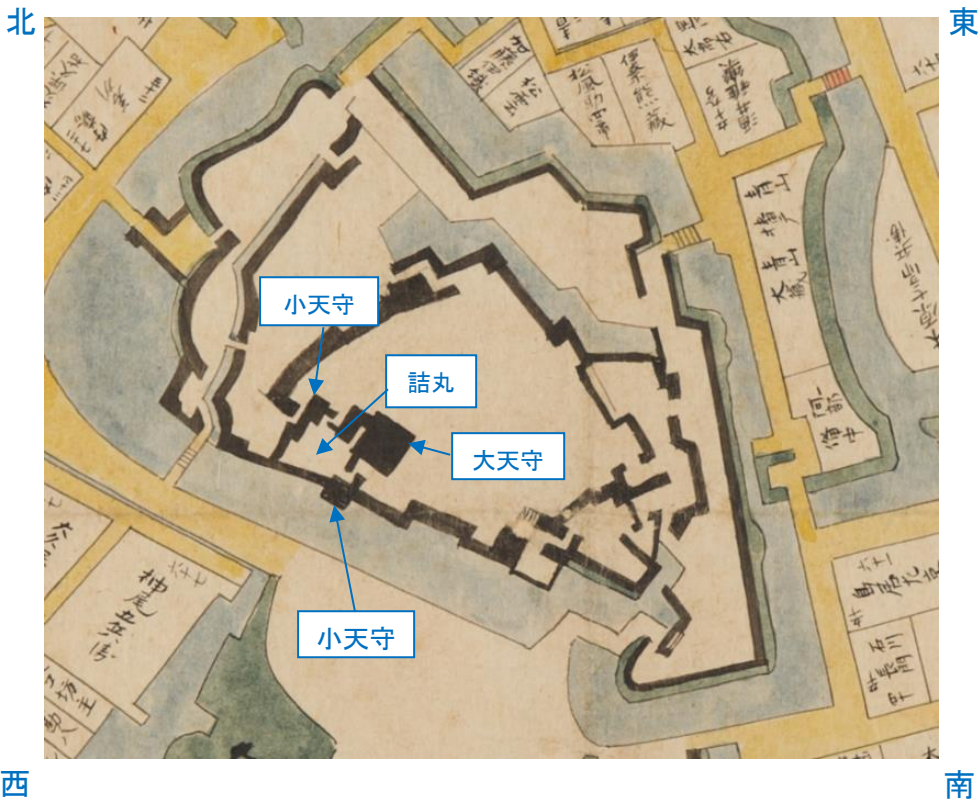
縦 27.6cm、横 40.0cm

松江歴史館所蔵

「江戸始図」で明確になった家康が築いた江戸城の主な特徴

① 姫路城のように本丸に大天守と小天守を多門櫓で連立した詰丸を備えていた

※詰丸^{つめのまる}：天守群で囲んだ曲輪^{くるわ}（天守曲輪）



② 熊本城のように本丸の出入口に強力な軍事機能の連続外柵形を設けていた

※連続外柵形^{そとますがた}：城壁を外側に張り出して互い違いにした出入口を連続させるもの

